

【論文】

曖昧さに対する態度が適応感と対処行動に与える影響

中嶋 史織 (岩手大学大学院総合科学研究科)

奥野 雅子 (岩手大学人文社会科学部)

I. はじめに

試験の結果が出るまでの間をあなたはどんな気持ちで、どのように過ごすであろうか。あるいは、今話をしている相手が自分に好意的であるのか、敵対的であるのかわからない場合、あなたはどうか行動するであろうか。こうした白黒はっきりしない曖昧な状況というのは日常に多く存在するが、多くの人が嫌い、避けたいと感じる。さらに、曖昧さに耐えられないことが心理的不適応につながることも多くの研究で示唆されている。その一方、曖昧さを受け入れ、楽しみを見い出せたりすることもある。このような状況では、人は曖昧さに対してどのような対処をとっているのだろうか。曖昧な状況に対して適応するためには、曖昧さにどのような態度をとることが効果的であるのか、また、曖昧さへの対処行動がどのように適応感を促進するのかについて検討する必要がある。しかし、曖昧さへの態度についての実証的研究は少なく、検討の余地がある。そこで、本研究では曖昧さに対する態度が適応感と対処行動に与える影響について検討する。

II. 問題と目的

1. 曖昧さの定義

Budner (1962) は、曖昧さを「十分な手がかりがないために、適切な構造化や分類化ができない状態」と定義した。そして、曖昧さを①「新奇性」、②「複雑性」、③「不可解性」の3つに分類した。「新奇性」とは手がかりが全くない状況であり、「複雑性」は手がかりがたたくさんありすぎる複雑な状況、「不可解性」は手がかりが異なった事態を招くような矛盾した状況である。また、Norton (1975) は、曖昧さを扱った記事から曖昧さの使用例を分析し、多義性、漠然性・不完全性・断片的、確率的、非構造的、情報の欠如、不確実性、非一貫性・矛盾・逆説的、不明瞭性の8つに分類している。

さらに、生活場面での何らかの曖昧さがストレスとなることが示す研究がみられる。例えば、起こる可能性のあるさまざまな苦痛に対して、正確な情報を与えられた患者は、手術の後、情緒障害を見せることが少ないことが報告されている (Janis, 1984)。これを受け、増田 (1998) は、曖昧さはそれ自体がストレスとなるのであり、曖昧さの減少によってストレス反応が軽減すると述べている。また、組織心理学の立場では、期待された役割に伴う曖昧さや矛盾・葛藤が大きなストレスになると考えている。さらに、田尾 (1989) は、看護師のバーンアウトに影響する要因として、煩わしさ、単調さ、曖昧さ、休憩不可、従事者依存の5つを抽出したが、この中で仕事の曖昧さがバーンアウトを規定する最大の要因であることを指摘した。このように、曖昧さは多くの人が嫌うものであり、ストレスの源であることが多くの研究から示されている。

2. 曖昧さへの非寛容について

曖昧さへの非寛容とは「曖昧な状況を恐れの原因として知覚(解釈)する傾向」(Budner, 1962)である。さらに、Budner (1962) は、自らが定義した曖昧な状況に対して抑圧、否認、不安、不快、破壊あるいは再構築行動、回避行動を示した場合、その個人は曖昧さに非寛容であると捉えた。また、Norton (1975) は、漠然性、不完全性、断片的、多義性、確率的、非構造的、不確実性、逆説的、不明瞭と特徴づけられる情報を、心理的不快・恐怖の源として知覚、解釈する傾向と定義した。そこで、「曖昧性耐性」と呼ばれ、刺激の特徴を曖昧さという側面からとらえ、それに対する反応の相違を個人差とみなす概念がある(今川, 1981)。これまでの曖昧さを扱った研究では、こうした曖昧さに耐えられるか、耐えられないかという次元に着目しており、特に曖昧さへの非寛容といった曖昧さへの耐えられなさについて取り上げられてきた。

Frenkel-Brunswik (1949) は、曖昧さに非寛容な者は、価値判断の局面において、しばしば現実を無視し、白か黒かをはっきりさせようとしたり、早急な結論に達したりする傾向、また他者の無条件の全面的な承認や拒絶を求める傾向があるとした。また、増田(1998)によると、曖昧さに対する耐性の低いものは、高い者より、新しくバイトを始めた、就活を始めた、サークルで人との付き合いが増えたなどの体験である生活事件をより脅威的なものとして捉えることが示された。一方、吉川(1986)によると、曖昧さに非寛容な人は、寛容な人と比較して活発であることが示されたが、攻撃的特性やのんきさについては高いという点にも注目すると、曖昧さに非寛容な人の活発な行動の内容が前後関係の考慮が不十分であり、衝動的、短絡的な性質を持つことも指摘されている。すなわち、曖昧さに非寛容な人は、情緒不安定さと不適応、衝動的行動傾向といった特徴が認められることになる(吉川, 1986)。さらに、曖昧さへの非寛容が留学生との接触行動の抑制要因となることも報告されている(米田, 2012)。加えて、曖昧さへの態度の中でも不安が強迫傾向に最も関連しており、曖昧さの統制の態度も強迫傾向と関連がみられること、抑うつ傾向においても曖昧さへの否定的態度のうち、不安との関連が強いことが示唆されている(西村, 2007)。

そこで、曖昧さに非寛容な者の対処に関する研究も行われている。友野・橋本(2002)によると、曖昧さに非寛容な者は自我脅威状況に置かれると、ほぼ一貫して積極的対処を行うことが示唆されている。また、友野(2010)によると、曖昧さに非寛容な者が対人関係ストレス状況に置かれると、その状況で生じた曖昧さに耐えることができず、そこから一刻も早く抜け出すために白か黒かという短絡的な思考で解決をはかることが動機づけられ、ネガティブなコーピングを行うことが示されている。加えて、対人場面における曖昧さに非寛容な者は、どのようなコーピングを行うかにかかわらずストレス反応を促進することも示されている。

曖昧な状況というのは多くの場合、判断や予測をすることが難しいことから、不安や恐れをもたらす。したがって私たちは曖昧さを嫌い、避けようとする。このように曖昧さを嫌い、避ける現象を経済学においては「曖昧性忌避」として扱っている(米田, 2012)。米田(2012)によると、一見同じ曖昧性忌避がみられたとしても、その現象のメカニズムは曖昧さの程度により異なるのだという。このことから、曖昧さへの寛容/非寛容がどのような曖昧な場面でも行動に影響を与えるのではなく、個人差はみられるものの、個人が感じる曖昧さがある一定基準を超えたときに、曖昧さへの寛容/非寛容が個人の行動に影響

響を与える」と説明されている。このように、曖昧さに非寛容であることが、不適応に影響することが示されており、曖昧さに関する研究の多くが非寛容な者の特徴を中心として扱った知見を提示している。

3. 曖昧さへの寛容について

曖昧さへの非寛容については様々な側面から定義され、特徴が示されてきたが、曖昧さへの寛容についての明確な定義は見当たらない。前述したが、曖昧さに関する研究は曖昧さへの非寛容について焦点をあてた研究がほとんどであり、曖昧さへの寛容についての見解は不十分であることが指摘されている(吉川, 1986)。その中でも、Budner (1962) は、曖昧さへの肯定的態度に着目している。曖昧さへの肯定的態度の一つとして、曖昧さに対する耐性の高さを取り上げ、曖昧な状況を好ましいものとして知覚する傾向であると述べている。一方、西村 (2007) は、曖昧さへの肯定的態度について、曖昧さに対して「脅威と感じず受け入れること」と「好んでかかわること」が混同されていることを指摘している。

吉川 (1986) によると、曖昧さに寛容な人は、自己に自信と確信を持ち、決断力があり、さらに他者や社会への不満や不信が少なく、対人関係において高い信頼感を持つとされる。また、曖昧さに寛容な人は、自律神経系の安定度がより高く、身体的自覚症状を訴えることも少ないことが示唆された。加えて、植村 (2001) によると、曖昧さへの耐性が高い者が低い者に比べ、潜在的な異質性への恐れが無さを示す指標である「異質耐性」が高いことが示された。さらに、曖昧さの「受容」が高い者は、曖昧な状況において、曖昧さの程度を精査できることも示唆されている(米田, 2012)。このように、曖昧さに寛容であることは、自己にとってポジティブな影響があることが報告されてきてはいるものの、寛容さに着目した研究は十分とはいえない。

4. 曖昧さへの態度の測定

曖昧さへの態度を測定する尺度は様々なものが作成されてきたが(Budner, 1962; Norton, 1975; 増田, 1998)、曖昧さへの耐えられなさを問う項目が大部分を占めている(西村, 2007)。たとえば、友野・橋本 (2005) が作成した「改訂版対人場面における曖昧さへの非寛容尺度」がある。この尺度は、曖昧さが生じる場면을対人場面に限定した質問項目である。米田 (2012) によると、この尺度は曖昧さへの非寛容を測定する尺度ではあるが、寛容を測定するものではないと結論付けている。西村 (2007) は、過去の曖昧さへの非寛容に関する研究において曖昧さへの否定的態度として一次元的測定に偏っていることを指摘し、これまでの流れとは一線を画した「曖昧さへの態度尺度」を作成した。「改訂版対人場面における曖昧さへの非寛容尺度」(友野・橋本, 2005) と「曖昧さへの態度尺度」(西村, 2007) の尺度項目は明確に独立した因子を形成したことから、これらの尺度が異なるものを測定していることが推測された。また、曖昧さに対する個人の反応は、曖昧さの内容によって変化するといえる。つまり、曖昧さへの寛容と非寛容が直線状の一軸として捉えられるわけではなく、曖昧さの対象が対人関係であるか、物理的な状況であるかによって曖昧さへの反応や態度は異なると考えられる。たとえば、対人場面における曖昧さを恐怖と感じる個人が、状況や現象に対する曖昧さにも同様に恐怖を感じるとは限らない。さらに、友野・

鹿内（2012）は、前述した二つの尺度を用いて曖昧さに対するパーソナリティ特性と抑うつとの関連性について検討した。その結果、「改訂版対人場面における曖昧さへの非寛容尺度」の方が、「曖昧さへの態度尺度」と比較して、抑うつに親和性があるパーソナリティ特性であることが示唆された。このことから、対人場面という限定された条件での曖昧さに耐えられないということが、抑うつと結びつきやすいことが示唆された。このように、曖昧さへの態度を測定する観点が尺度によって異なることが示されている。

5. 本研究の目的

これまでの研究より、曖昧さに対する態度が個人の感情や行動にどのような影響を及ぼすのかについて検討されてきた。また、曖昧さに非寛容であることが不適応に、寛容であることが適応的であることにつながることも示されてきた。しかし、曖昧さに対し寛容であるか非寛容であるかの一次元ではなく、多次元的に捉え適応との関係を検討したものは少ない。さらに、曖昧さに対する多次元的な態度が曖昧さに対してどのような対処行動をもたらすのかについては明らかにされていない。そこで、本研究では曖昧さに対する態度が適応感と対処行動に及ぼす影響を検討することを目的とする。

III. 方法

1. 調査対象者

大学生 111 名(有効回答数 107 (男性 46 名、女性 61 名)、平均年齢 19.26 歳、SD=1.07)

2. 調査時期

調査時期は 2017 年 11 月である。

3. 手続き

大学の講義時間の一部を利用して質問紙を配布し、回答は統計的に処理し個人は特定されないこと、調査結果は研究目的以外には使用しないことなどを説明し承諾を得て実施した。

4. 質問紙の構成

①フェイスシート（性別、年齢）

②曖昧さへの態度尺度（西村,2007）26 項目、「享受」「不安」「受容」「統制」「排除」の 5 因子。「1. 全く当てはまらない」から「2. 非常に当てはまる」の 6 件法で回答を求めた。

③大学生用適応感尺度（大久保・青柳,2003）29 項目、「居心地の良さの感覚」「被信頼・受容感」「課題・目的の存在」「拒絶感の無さ」の 4 因子。「1. 全く当てはまらない」から「6. 非常に当てはまる」の 6 件法で回答を求めた。

④コーピング尺度（岡安,1992）20 項目、「計画」「情報収集」「再検討」「努力」「問題価値の切上げ」「問題価値の切下げ」「思考回避」「諦め」「開き直り」「静観」の 10 因子。「1. 全く当てはまらない」から「6. 非常に当てはまる」の 6 件法で回答を求めた。なお、質問紙の教示文には「ここでは、曖昧状況について伺います。曖昧状況とは、

たとえば、友達に連絡しても長時間返信がこなかったり、話をしている相手が、自分に好意的であるのか、敵対的であるのかわからなかったり、新しいバイト先でどう動いていかわからなかったりなど、白黒はっきりしない状況です。」と説明し使用した。

5. 分析方法

曖昧さへの態度を説明変数、大学生用適応感尺度とコーピング尺度を目的変数として強制投入法により重回帰分析を行った。

IV. 結果

曖昧さへの態度が適応感とコーピングに及ぼす影響の分析結果を図1に示す。

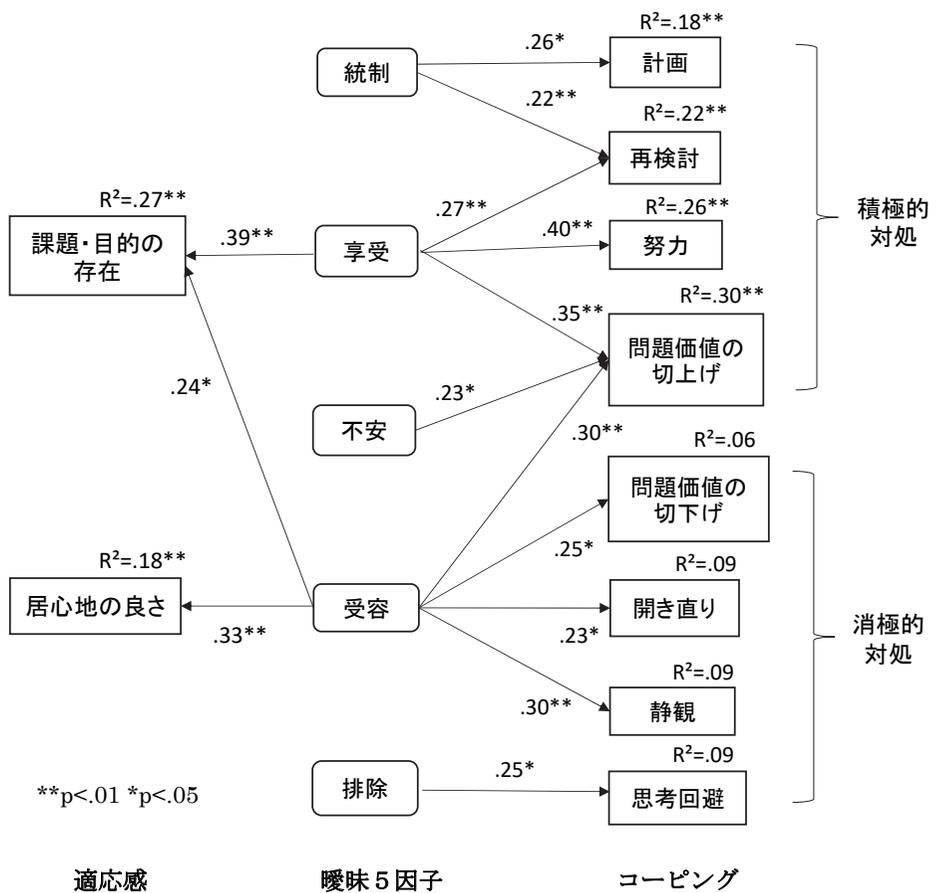


図1 曖昧さへの態度が適応感とコーピングに及ぼす影響

V. 考察

1. 曖昧さに対する態度が適応感に与える影響

曖昧さを「受容」すること、つまり、曖昧さをそのまま認めて受け入れられるといった「曖昧さへの寛容さ」(西村, 2007)が、熱中できるものがある、好きなことができるなど、課題や目的の存在感を高め、周囲に溶け込んでいる、周りの人と楽しい時間を共有しているといった「居心地の良さ」を促進させることが示唆された。さらに、曖昧さを魅力的なものとして評価し、積極的に関わっていく態度である曖昧さを「享受」することも、「課題や目的の存在」を高めることが示された。これは曖昧さに対する寛容さが適応を促進させるというこれまでの報告と一致する。多くの人がストレスと感じるような曖昧さを受け入れられることができれば、居心地の良さが促進することは納得できる。吉川(1986)も、曖昧さに寛容な人は特性論的に、社会への不満や不信が少ないとしている。さらに、曖昧さに寛容な人は、不確かな状況をポジティブなものとして捉え、新しい何かを発見するときに高まる欲求としての好奇心が強いことが報告されている(Litman, 2010)。ゆえに、こうした好奇心の強さが、「課題や目的の存在」を高める可能性が考えられる。

一方、適応感のうち、他人から頼られていると感じる、必要とされていると感じるといった「被信頼・受容感」とその状況で嫌われていると感じる、無視されていると感じるといった感覚の無さである「拒絶感の無さ」は、曖昧さを受け入れる態度や楽しみを見出す態度によって促進されなかった。米田(2012)が、曖昧さの対象が人であるか、そうでないかで個人の曖昧さへの反応・態度は異なるとしているが、被信頼・受容感や拒絶感の無さは、対人関係によってより影響するものであると考えられる。本研究では、対人関係に限定せずに曖昧さへの態度を扱ったため、被信頼・受容感、拒絶感の無さに影響しなかったことが予想される。曖昧さへの肯定的態度は、適応感のすべての側面を促進するわけではないことが考えられる。

また、曖昧な状況を否定的に評価し、知的に把握、対処しようとする傾向である曖昧さの「統制」や、曖昧さを認めず、排除して白黒つけたい傾向である曖昧さの「排除」、曖昧さに不安などの情緒的混乱と、それに伴う対処のむずかしさを感じる傾向である「不安」は適応感に影響を与えていなかった。曖昧さに非寛容な人は、寛容な人と比較して、情緒不安定さや不適応といった特徴がみられることから(吉川,1986)、曖昧さへの「統制」「排除」「不安」といった否定的態度が、必ずしも曖昧さへの非寛容にはつながらないことが推察される。

2. 曖昧さに対する態度が対処行動に及ぼす影響

曖昧さへの否定的態度である「不安」は、試練の機会だと思ふことにする、その経験から何かしら得るところがあると考えするなど、問題価値を切り上げるというポジティブな対処を促進することが示唆された。つまり、曖昧状況に不安になることは、その状況を試練や学びの機会と捉えられるようになる可能性が考えられる。

また、曖昧さを「受容」する態度も、問題価値を切り上げることを高めるが、大した問題ではないと考えることにする、その問題のことで深刻にならないようにするなど、問題価値を切り下げることも促進させることが示唆された。この結果から、曖昧さをどのように受け入れるかによって問題価値を切り上げるか、切り下げるかの違いに影響することが

考えられる。西村（2007）は「受容」は曖昧さをそのまま受け入れる態度であるが、たとえば、「不安」が高い場合と低い場合では、曖昧さを「受容」したときに、曖昧さを安定して受け入れられるか、それとも曖昧さが脅威となるのに避けられずに受動的に受け入れてしまい不安定になるかという点で異なってくると述べている。曖昧さへの「不安」が、問題価値の切り上げを促進させることが示唆されたことから、曖昧さに不安を感じたまま曖昧さを受け入れてしまっている場合は、問題価値を切り上げるような対処につながるものが推測される。一方、曖昧さに不安を感じずに受け入れることができるという曖昧さへの寛容さを持っていることが、大した問題ではない、深刻にならないといったような問題価値を切り下げるような対処につながるのかもしれない。

さらに、「受容」は、曖昧な状況に対して開き直すことや、時が過ぎるのに任せて問題の成り行きを見守る、といった静観を促進させることも示された。友野・橋本（2002）が曖昧さに非寛容な者は問題の原因を即決的に求め、その解決法を一刻も早く実行に移したいという欲求から、直接的な対処をすとしてしている。しかし、本研究の結果より、曖昧さを受け入れられることは、何か行動を起こすよりも、曖昧な状況を静かに見守ることにつながると考えられる。吉川（1986）も、曖昧さに寛容な人は、周囲の状況と調和を保つように衝動的行動が統制あるいは抑制されるため、可視的な行動は非寛容な人より相対的に少なくなるとしている。つまり、曖昧さを受け入れられるのであれば、曖昧な状況をどうにかしようと実際的な行動をとることもない。米田（2012）も、曖昧さの「受容」は曖昧さの程度を見極めるためにつかず離れずいることであり、行動として現れにくいとしている。ゆえに、「受容」の態度は、計画や再検討、努力といった積極的で実際的な行動にはつながらず、消極的な対処が導くことが考えられる。

また、「統制」は、やるべきことを考える、対策を立てる、といった「計画」を促進することにつながり、状況を思い返しそれを把握しようとする、問題の原因を見つけようとする、といった「再検討」を促すことも示唆された。曖昧さの「統制」とは、情報が足りないと動きづらいので、できるだけ情報を集めたい、確実でないところは確認してから明らかにしたいといった態度である。これは曖昧さを減少させるために曖昧さに接近する傾向である（米田,2012）。そのために曖昧な状況を思い返し、やるべきことを考えるとといった積極的な対処行動が促されることが考えられる。しかし、新聞・本・雑誌・テレビ等から、その問題に関連した情報を得る、人からその問題に関連した情報を得るといった「情報収集」には影響しなかった。曖昧な状況については質問紙の問題文で例示したが、そうした状況について新聞や本、人などから情報を得るといったことが結びつかず、それよりも自分自身で曖昧な状況について再検討することを選択することが予想される。

さらに、曖昧さを魅力的なものと評価し、関与していくことに楽しみを見出す傾向（米田,2012）である「享受」は、再検討を促し、その状況を変えるよう努力する、自分自身の何かを変えるよう努力する、といった「努力」にもつながり、問題価値を切り上げることも促進することが示された。曖昧さの「享受」の態度には、いろんな可能性をすべて試してみたい、見たことのないものは見てみたいといったものが含まれる。そうした好奇心のような気持ちから、その状況にとどまらず、再検討したり、努力したりといった積極的な対処を促進することが推察される。このように、曖昧さに楽しみを見出す態度は、消極的な対処ではなく、積極的な対処を促すことが示された。つまり、曖昧さをそのまま受け入れられ

るという寛容さは、再検討や努力などの積極的な対処にはつながらないのに対し、曖昧さを魅力的なものとして受け入れられる場合は、自ら行動を起こすことにつながるといえる。曖昧さの「享受」は曖昧さを好ましいものとする肯定的な認知であることから納得できる。しかし、曖昧さへの寛容さである「受容」も曖昧さへ楽しみを見出す傾向である「享受」も共に、曖昧さを価値のあるものとして評価する問題価値の切り上げを促すことから、曖昧さに対して肯定的態度を取ることができれば、その曖昧なこと自体に価値を見出せることにつながると考えられる。

一方、どっちつかずな立場はどちらか一方にはっきりさせるべきだ、どっちつかずであることはよくないと思うなど、白黒つけたいといった曖昧さの「排除」が、「思考を回避」させることにつながることが示唆された。曖昧さを排除したいという気持ちから、曖昧なことに関して考えることを全く行わないだけでなく、曖昧なことに対して十分向き合わずに対処行動を起こしてしまうリスクも予想される。

VI. 総合考察

1. 本研究の成果

本研究では、曖昧さに対する態度が適応感にどのような影響を与えるのか、そして、曖昧さに対する態度がどのような対処行動を導くのかについて検討した。その結果、曖昧さを受容し、享受するという肯定的態度が適応感を促進させることが示された。それらの肯定的態度によっては、課題・目的の存在を意識し、居心地の良さが高まるという影響もたらされた。このことは、曖昧さに対する肯定的態度があらゆる適応感を高めるというわけではなく、適応感の一部を促進させていることが考えられる。一方、これまで曖昧さに非寛容であることが心理的不適応につながることがいわれてきたが、曖昧さに不安になること、排除したいと思うこと、統制したいといった曖昧さに対する否定的態度は適応感を低下させるわけではないことが示唆された。

さらに、曖昧さに対する態度が対処行動に与える影響について検討した結果、曖昧さを受容する態度は問題価値を切り上げることにつながる一方、消極的な対処行動を促進させることも示された。受容する態度がさまざまな対処行動につながる一方で、曖昧さを享受する態度は再検討、努力、問題価値の切上げといった積極的対処につながることを示唆された。また、曖昧さへの否定的態度である不安な感情は問題価値を切り上げるという肯定的な対処行動を導く可能性も示された。さらに、曖昧さを統制する態度は、計画や再検討といった積極的対処を導き、曖昧さを排除しようとする態度は、思考回避といった消極的な態度を促すことが示唆された。

2. 臨床への示唆

これまで曖昧さに非寛容であることが心理的不適応につながることがいわれてきたが、曖昧さに対する寛容と非寛容についての是非を一義的に評価することはできないといえる。つまり、曖昧さに寛容であれば適応的であるとは言い切れない。むしろ、適応感を向上させ、ポジティブな対処行動を引き出すためには、その文脈に適した曖昧さに対する態度が求められる。

友野・橋本(2002)によると、一般的に、積極的に対処する問題解決型のコーピングは、

適応的なものであるといわれている。本研究では、曖昧さを受容することは適応感を促進させることにはつながるが、問題価値を切り上げる、反対に、問題価値を切り下げる、開き直る、静観するといったさまざまな対処行動にもつながることが示されている。ゆえに、曖昧さをただ受け入れればいいというわけではなく、その対処行動を肯定的なものにする必要がある。逆に、曖昧さに不安を感じることで、積極的な対処行動が導かれることもあると考えられる。これまでは、曖昧さに対して不安を感じるというような否定的態度が、最も強迫傾向や抑うつに関連すると述べられてきた（西村，2007）。しかし、本研究では、曖昧さに不安を感じることで、現在向き合っている問題の価値を高めるきっかけになることが示されたため、そういった感情の体験は貴重であると考えられる。同様に、曖昧さを統制しようとするような否定的態度が、計画や再検討といった積極的な対処行動につながることも示されている。

曖昧さは世の中にありふれており、曖昧な状況を避けて通ることは難しい。そうした曖昧さに対して、寛容であるか非寛容であるかを変化させることは簡単ではない。自身が曖昧さに対して適応していくためには、曖昧さに対する寛容の程度に注目することよりも、自分自身が曖昧さに対してどのような態度を取っているかを意識し、それらに対する対処行動を主体的に選択していくことが望ましいのではないかと考えられる。

3. 本研究の限界と今後の課題

本研究では、曖昧さへの態度が適応感と対処行動に及ぼす影響について検討した。しかし、対処行動を繰り返すことで曖昧さへの態度が変化するという相互作用も考えられる。つまり、曖昧さへの対処行動が曖昧さへの認知や感情に変化を与えることが予想される。たとえば、曖昧な状況に対して価値を切り上げるような対処を繰り返すと、曖昧な状況に不安を感じるということもあるだろう。

今後は、対処行動が曖昧さの認知や感情に及ぼす影響についても時間軸を考慮し、方法論と共に検討する必要がある。また、本研究では曖昧さへの態度が適応感と対処行動に及ぼす影響を検討したが、どのような対処行動がより適応感を高めるのかという観点については検討していない。積極的な対処行動が適応的なものであるといわれる一方、そうした対処行動と心理的不適応との関連性が示された結果も報告されている。よって、曖昧さに非寛容な状況で行う積極的な対処が、必ずしも適応的な対処になるかどうかについては疑問が残る。今後、曖昧さに対する態度によって影響を受けた対処行動自体が、どのように適応感を高めるのかについても検討する必要がある。

また、本研究は、大学生を対象としたが、調査対象者の年齢が異なれば、曖昧さへの態度やそれが影響する適応感も変化する可能性がある。さらに、曖昧さの内容によっても対処行動は変化すると考えられるため、曖昧さの内容を分類して検討を行うことも望まれる。本研究は質問紙調査を通して量的検討を行ったが、今後は曖昧さへの態度変容に着目し、質的な検討を行うことも必要であるだろう。

【引用文献】

Budner, S. (1962). Intolerance of ambiguity as a personality variable. *Journal of*

- personality*, 30, 29-50.
- Frenkel-Brunswick, E. (1949). Intolerance of ambiguity as an emotional and perceptual personality variable. *Journal of Personality*, 18, 108-143.
- 今川民雄 (1981). Ambiguity Tolerance Scale の構成(1) : 項目分析と信頼性について 北海道教育大学紀要, 第一部 C, 教育科学編, 32, 79-93.
- Janis, I. L. (1971). *Stress and frustration*. New York: Harcourt Brace and Jovanovich. (秋山俊夫(訳)(1984). ストレスと欲求不満—こころの健康のために— 北大路書房)
- Litman, J. (2010). Relationships between measures of I- and D-type curiosity, ambiguity tolerance, and need for closure: An initial test of the wanting-liking model of information-seeking. *Personality and Individual Differences* 48, 397-402.
- 増田真也 (1998). 曖昧さに対する耐性が心理的ストレスの評価過程に及ぼす影響 茨城大学教育学部紀要(人文・社会科学芸術), 47, 151-163.
- 西村佐彩子 (2007). 曖昧さへの態度の多次元構造の検討—曖昧性耐性ととの比較を通して パーソナリティ研究, 15, 183-194.
- Norton, R. (1975). Measurement of ambiguity tolerance. *Journal of Personality Assessment*, 39, 607-619.
- 大久保智生・青柳肇 (2003). 大学生用適応間尺度の作成の試み—個人—環境の適合性の視点から パーソナリティ研究, 12(1), 38-39.
- 岡安孝弘 (1992). 大学生のストレスに影響を及ぼす性格特性とストレス状況との相互作用 健康心理学研究, 5, 12-23.
- 田尾雅夫 (1989). バーンアウト—ヒューマン・サービス事業者における組織ストレス 社会心理学研究, 4, 91-97.
- 友野隆成 (2010). 対人場面におけるあいまいさへの非寛容と特性的対人ストレスコーピングおよび精神的健康の関連性 社会心理学研究, 25, 221-226.
- 友野隆成・橋本幸 (2002). あいまいさへの非寛容がストレス事象の認知的評価及びコーピングに与える影響 性格心理学研究, 11, 24-34.
- 友野隆成・橋本幸 (2005). 抑うつ素質—ストレス・モデルにおける性差の検討: 対人場面におけるあいまいさへの非寛容を認知的脆弱性として 健康心理学研究, 18, 16-24.
- 植村善太郎 (2001). あいまいさへの耐性と集団同一性が新入成員への寛容的反応に及ぼす効果 性格心理学研究, 10, 27-34.
- 米田晃久 (2012). Tolerance of Ambiguity 概念の再考と曖昧な場面における行動との関連—異文化接触場面を中心として— 平成24年度神戸大学大学院国際文化学研究科博士論文 (未公刊)
- 吉川茂 (1986). 曖昧さへのトレランス—イントレランスの基本的相違点に関する研究 関西学院大学人文論究, 35, 94-121.